

# 日本の中高生が言うところの「神」とは何なのか

## ～複数の語義とその使い分けについて～

石島 茉優<sup>\*1</sup>

指導教員：竹内 一樹<sup>\*2</sup>・草野 昂志郎<sup>\*2</sup>・三岡 恵子<sup>\*2</sup>

Email: kazuki\_takeuchi@shotoku.ed.jp

\*1: 聖徳学園高等学校 3年

\*2: 聖徳学園中学・高等学校

◎Key Words 宗教, 思想文化, 国際交流

### 1. はじめに

この研究を行うにあたって契機となったのは、2022年の7月に日本で働くインドネシア人の子どもが集まる学校との間に行われた校内での交流会に参加したことである。相手方のほとんどはイスラーム教徒で、交流会が始まる前に「お祈りの時間だから」と席を外された。知識としてはわかっているが、いざ実際にお祈りの時間というものを目にしてはじめてその習慣が実在することを意識するに至った。そして、イスラーム教以外にも、例えばカトリックのミサやプロテスタントの日曜巡礼、仏教の読経や五体投地など、知識として持っていた宗教的習慣がこのように行われているのだらうと、この世界に存在する宗教すべてに対して現実味が増したのであった。

この経験から、本稿では「宗教」を「複数の信者が共通のものを信仰し、共通の規則に則っている」状態、転じて「共通の世界観を持っている」状態と定義し、研究を行うこととした。

### 2. 仮説

人類史と宗教とは切り離すことが困難である。なぜなら、信仰というのは人々を取りまとめ得る一つの強大な手段であるからだ。ゆえに、宗教と神の存在もまた切り離すことが困難である。しかし、現代における日本の中高生は宗教的な意図を持たずに「神」という語を使用することがある。この中高生の神への関わり方を論じるうえで、現代人の宗教離れが大きく影響していることは否定するまでもないだろう<sup>(1)</sup>。

このように、日本人、こと中高生にとって宗教とは遠い存在であると言えるが、一方で「神」という語は中高生の日常会話の中で頻繁に用いられる。そこには神という語

が神そのものの存在を示すのではなく、単に能力の高さや調子が良好な状態を指し示す形容詞的用法で用いられているといった背景があるのではないかと考えた。つまり、神という語は宗教から離れ、より身近な語句用法としての立ち位置を獲得しつつあるということに着目した。

しかしながら、海外では依然として伝統的な宗教と神の関係は継続されていると考えるのが妥当である。例えばイスラーム教徒などは、不変にその習慣を引き継ぐ信徒の代表例と言えよう。この日本と海外での宗教の捉え方に対する相違が、こと国際交流という分野では顕著に表れ心理的に深い関係を築き上げる妨げになっているのではないかと考えた。

本稿は、日本の中高生の使用する神という語の語法を解き明かすことによって互いの価値観に対する知見を広め、その中で共通項を模索し合うような、国際的により緊密かつ相互的な交流関係を形成する一助として、宗教的視点を持つことを提案することを目指すものである。

### 3. 中高生の信仰と、「神」という語への認識

#### 3.1 アンケート結果とその考察

中高生が用いる「神」という語への認識を調査するにあたって、回答者の信仰の有無、信仰の詳細、そして「キリスト教の神」「日本の神」「日常会話上の『神』」それぞれについて思い浮かべるものについてのアンケートを聖徳学園中学・高等学校に在籍する72名の中高生に回答してもらった。以下はGoogleフォームで作成し、校内SNSである「Talknote」に配信して行ったアンケートの結果を表にまとめたものである。

表1 中高生の信仰の有無と詳細

あなたは何らかの宗教を信仰していますか？
はい：9人 いいえ：63人
はいと答えた人に質問です。それはどのような宗教ですか？
キリスト教（宗派は問わない）：1人 イスラム教（宗派は問わない）：0人 仏教（宗派は問わない）：4人 上記にないその他の宗教：4人 答えたくない：0人
いいえと答えた人に質問です。あなたの信仰に関する考えにもっとも近いものを選択してください。
無宗教（神やそれに類する存在は認める）：37人 無神論（神やそれに類する存在を認めない）：13人 その他：7人 答えたくない：6人

表1より、特定の宗教は信仰していないと答えた回答者がおよそ86%を占めているとわかる。これは2020年時点のフランスでの「宗教を信じていない（無神論）」割合が29%であった<sup>2)</sup>ことや、2021年時点におけるアメリカ合衆国での「信仰を持たない」者の割合が人口の23%であった<sup>2)</sup>こと、そして海外諸国の中でも「無宗教」と答えた人の割合が48%と多かった2018年時点のニュージーランド<sup>3)</sup>と比較しても多いと言えよう。その上、日本では無宗教と回答した者が60%弱おり、特定の宗教は信仰していないものの神の存在は信じている、という日本の中高生が多いことがうかがい知れる。<sup>1)</sup>

表2 「キリスト教の神」で思い浮かべるもの

信仰：	キリスト	キリストの父	マリア	ゼウス	他 <sup>2)</sup>
仏教	2	1	-	1	-
キリスト教	-	1	-	-	-
他教	2	-	-	-	1
無宗教	29	5	1	1	1
無神論	9	2	2	-	-
他	10	-	-	1	2
計	53	9	3	3	4

表3 「日本の神」で思い浮かべるもの

信仰：	アマテラス	八百万の神	天皇	仏	他 <sup>3)</sup>
仏教	-	3	-	1	-
キリスト教	1	-	-	-	-
他教	-	2	-	-	1
無宗教	9	4	3	4	15
無神論	5	4	2	-	1
他	4	1	2	1	5
計	19	14	7	6	22

表2, 3, 4は自由回答式の質問であったために全員が回答を行ったわけではないが、9割以上の回答者がなんらかの回答を行った。表2からは信仰の有無や内容に関わらず「キリスト教の神」は「イエス・キリスト」であるという認識が一般的であることが読み取れる。また、表3では表記の都合上「アマテラス」以外の神の名前の回答については他で一括りにしてしまった<sup>3)</sup>のも手伝ってか、回答が割れている。それを抜きにしても「八百万の神」といった特定の神を指さない名称や「仏」、「天皇」など、キリスト教の神を問われた場合と比較して回答の幅の広さが特徴的だ。また、どちらの場合においても神の存在を示す固有名詞の回答が多かったことも念頭に置くべきだろう。

表4 「日常会話上の『神』」で思い浮かべるもの

信仰：	褒め言葉的用法	宗教的用法	他 <sup>4)</sup>
仏教	2	2	-
キリスト教	-	1	-
他教	4	-	-
無宗教	23	11	3
無神論	9	3	-
他	6	4	3
計	44	21	6

表4からは宗教的な意味合いではなく褒め言葉として「神」という語を日常的に用いている中高生が全体のおよそ3分の2を占めていることがわかる。具体的な回答としては「すばらしい」や「天才的」、「すごい」などが多く見られた。

<sup>1)</sup> ここで示されているパーセンテージはすべておよその数であるため、厳密な数字とは異なる場合がある。

<sup>2)</sup> ここでのその他の例としては「神聖なもの」や「神と悪魔の存在」といったもの。

<sup>3)</sup> ここでのその他の例としては「スサノオ」「イザナミ」といった固有の神の名前や、「七福神」「神社」といったもの。

<sup>4)</sup> ここでのその他の例としては特定の曲名など。

### 3.2 アンケート結果からの推察

以上の結果より、「知識としての『神』」、つまり神の存在は複数のものを指し、また「日常会話上で用いられる『神』」は宗教的存在を示さない場合、多くは褒め言葉として使用されていることがわかる。

神の存在はそこに「〇〇教の神」という指定をされることによって変化するものであり、個人がその知識を持っている場合には具体的な名称を、そうでない場合は大まかな印象を回答する傾向が見られる。

しかし「日常会話上で用いられる『神』」も完全に宗教的意味合いを失っているわけではない。アンケートからもわかる通り3分の1は宗教的意味合いを持つ回答（「天上の存在」、「不可視なもの」、「なんとなく畏怖の念を持つ大きな存在」など）をしている上、褒め言葉と分類した中にも「神のように素晴らしい」や「まじ救われた」など宗教的意味合いから転じて褒め言葉として用いられているものも多く見られたからである。

このことから、日本の中高生にとって「神」という語は非常に身近なものであり、そこから転じて褒め言葉などプラスの語として用いられているのが一般的用法であるということがわかる。

## 4. 研究の活用

### 4.1 日本と海外諸国の無宗教、無神論

海外諸国、こと欧米においては無宗教と無神論はしばしば混同される傾向にあり、またそれらは無政府主義などの革命的な思想と結び付けられることが少なくない。背景として、本稿で宗教の定義とした「共通の規範に則る」ことをしないことが法を犯すことに繋がると思われているのかもしれない。しかし、上記の調査結果から、日本の中高生が自認する無宗教や無神論といった属性は、必ずしも革命的思想を指し示すものではないことが推察される。それは彼らが信仰とは別に知識として神を認識し、日常会話上で宗教的意味合いを持たず神という語を使用することからも明らかである。

そもそも（これは一つの研究テーマとして重要なものであるためここでは軽くしか触れないが）日本人の信仰に関しては、神道を宗教とするのか、はたまた祖先崇拜を宗教とするのか、など慣習と宗教を切り離すことが困難である。それゆえ他国の物差しで日本の宗教観を測るのが適切ではないというのは、島藺進氏が著書で『『国家神道』は『宗教』ではない国家統治の儀礼（祭）や道徳の教え（教）の領域の事柄であり、その限りで『祭政一致』や

『祭政教一致』は成り立つべきものとされていた。その意味で『祭政一致』に関わる国家や政治の儀礼や教えと、一人一人の心の事柄である『宗教』の領域は別個のものとしてされていた。」と述べている<sup>(4)</sup>ことから明らかである。

### 4.2 信仰への自覚の重要性

他国に訪れた際に無宗教や無神論の者であると何の注釈もなしに伝えてしまえば、無用の誤解を招いてしまうであろうことは想像に難くない。日本人が必ずしも他国の事情に明るくはないように、他国の人間が日本の事情に明るいとは限らないからである。

ゆえに、日本人が自身の信仰について適切に理解し、それを言語化できることが望ましい。宗教を信ずるものにとって信仰は人間の根幹を成すものであり、理解を深めんとする姿勢はそれだけで真摯さを演出し、無用の誤解を防ぐ一助にすらなり得るからだ。海外を訪れる際に、わずかでも価値観が違うということを念頭に置いておくだけで、より円滑な国際交流が望めるだろう。

日本と海外との宗教観の差というものを知識や知見といったもので埋めることは不可能なことではない。むしろ、相手の宗教観や文化といったものに興味を持つことが、一つの敬意の示し方であり、円滑な国際交流に欠かせない態度なのではないだろうか。

## 5. おわりに

本稿では日本の中高生の「神」という言葉への関わりかた、および使い方について論じた。契機こそイスラーム教徒との交流であったが、この研究は国際交流のさらなる発展、こと日本人の海外進出に関して生きるだろう。宗教的観点から日本人の価値観を探り、生かしていく上での課題として、1. 比較対象となる他国のデータ収集 2. 中高生以外の世代への調査などが挙げられる。これらの課題からもわかる通り、より広い範囲でのデータ収集が重要であるということを念頭において、日本人の国際化に生きるような情報を収集し、伝えていくことを目指していきたい。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、聖徳学園アカデミックアドバイザーである山名和樹先生に多大なるご協力をいただいたことを、この場を借りて厚く感謝いたします。

また、本稿を作成するにあたりアンケートに回答をくださった聖徳学園中学・高等学校に在籍する72名の

生徒のみなさま、および声掛け等で協力してくださった  
聖徳学園教職員のみなさまと、本稿を読んで意見や訂正  
をしてくださった指導教員のお三方、久保圭司先生、山田  
将大先生に特別の感謝を申し上げます。

#### 参考文献

- (1) 文化庁宗務課 (2022-12-9). 「2022 年度宗教統計調査『主  
要推移の推移 教師・信者数』」. e-Stat.  
<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003284680>, (最終閲  
覧日：2023-6-26)
- (2) 文化庁宗務課(2022)「海外の宗教事情に関する調査報告書」  
p85, p133
- (3) Stats NZ Tatauranga Aotearoa(2018). 「2018 Census place  
summaries『New Zealand』」. Stats NZ Tatauranga Aotearoa.  
[https://www.stats.govt.nz/tools/2018-census-place-  
summaries/new-zealand](https://www.stats.govt.nz/tools/2018-census-place-summaries/new-zealand), (最終閲覧日：2023-6-29)
- (4) 島藺進 (2012). 『国家神道と日本人』 p7. 岩波書店